

2024年7月7日

説教題「御名を知らせる」ヨハネによる福音書 17章 17～19、24～26 節

主任牧師 加藤 誠

「彼らのためにわたしは自分自身をささげます。彼らも、真理によってささげられた者となるためです」(ヨハネ 17章19節)、「わたしは御名を彼らに知らせました。また、これからも知らせます」(同26節)。

先週、壮年会から「神学生への祈りと献金を！」のアピールが配布されました。連盟の三つの神学校（西南、東京、九州）の働きと、そこで学ぶ神学生を覚えて「祈り、ささげよう」というアピールで、その最後は「大井教会から、主の召命を受け、献身者として立ち上がる人が現れることを皆で願い、祈りましょう」という言葉で結ばれていました。大井教会のこれからを考えても、連盟諸教会のこれからを考えても、ほんとうにそのことを真剣に祈りたいと思います。ただその時に、「献身」は神学校に行く「特別な人のこと」であって「わたしは関係ない」という思いがあるなら、「ほんとうにそれでいいのだろうか？」ということ、今朝、問うてみたいのです。

この数年間、連盟で「これからの伝道者養成」を検討する話し合いを重ねる中で「献身を改めて考えてみたい」という議論がありました。私たちは「これからの人生を福音宣教のためにささげる決意が与えられて、神学校で学ぶ思いを与えられた人」を「献身者」と呼ぶわけですが、その時にもし私たちが「自分は神学校に行っていないから献身者ではない」と考えるなら、それは違うのではないか。クリスチャンは全員がキリストに従う決意をいただいた時点で、それぞれの「献身」が始まっている。一人ひとりの「献身」が教会生活で深められる延長線上に「すべてを後ろにおいて神学校で学ぶ思い」が育まれていくのであり、その「献身」は「連続している」のではないか。

例えばローマ 12 : 1～2 でパウロは「クリスチャン一人ひとりが神に喜ばれる聖なるいけにえとして自分を献げる。この世に倣うのではなく、神の御心を求めて、神が喜ばれることをわきまえ、日々の歩みを神への礼拝としてささげるように招かれている」と語っています。普段はこの世の価値観にどっぷり浸かって日曜日だけ神に心を向ける。「この世的生き方」と「クリスチャン的生き方」の二つを使い分けて都合よく生きるのではなく、日曜日の礼拝が月曜日から土曜日までの歩みと重なっていく。「イエスを主と告白する」ことが、月曜から土曜の間も「わたしのものさし（基準）」となっていく。そのような「献身」にすべてのクリスチャンは招かれているのです。

バプテスト教会は約四百年前、それまで何百年も家の宗教、国の宗教としてキリスト教が当たり前で、みんなが自分から聖書を開くことも祈ることもなかった時代に、「自分の意志で聖書を読み、クリスチャンとして生きることを選び取った者で教会をつくろう！」と誕生しました。最初期のバプテスト教会は「バプテスマの恵みにあずかった者の責務」を次のように告白しています（『第一ロンドン信仰告白』4 1 項）。

「この礼典（バプテスマ）を受けるように、キリストによって導かれている者に対して、聖書は彼らが宣教する弟子となることを要求している。これは特別な教会と役員、あるいは特別な人に要求されているのではなく、キリストの委託は弟子たる者すべてに与えられているものに他ならない。」

それゆえ彼らはバプテスマを受けたばかりの教会員に「按手」を施しました。生まれたてのクリスチャンもキリストの弟子として、御言葉を宣教し牧会を担う責務があること、その責務を聖霊の導きを受けて良く担うことができるようにと、教会は祈りを合わせたのです。「聖書を読んで、御言葉を語る責任を負っているのは牧師だけ」ではない。信徒一人ひとりが「自分で聖書を読み、神の語りかけを聴き、そして御言葉を人々に紹介していく責任」をいただいている。ローマ 12 章に見たように「この世の価値観」と「主イエスの価値観」の二つを都合よく使うのではなく、どのような時も「主イエスならどうされるだろうか？」を尋ね求めながら歩んでいく「献身」というものを、バプテストは一人ひとりの信徒が自覚的に考えたのでした。

ただそのような「献身」は、私たちの「頑張り」で可能になるものではありません。私たちの献身の祈りに先だって、実は主イエスご自身が自分をささげてくださいたいこと。今日も主イエスが私たちのために祈り続けてくださっていることを覚えたいのです。ヨハネ 17 章 15 節から読みますと、悪（神に逆らう思い）があふれる世にあって、キリストに従う者たちが「そこから取り去られる」のではなく「世のただ中にとどまり続けながら」、「聖なる者」「真理によってささげられた者」となることを主イエスは祈っておられます。これまでも主イエスは弟子たちに「御名を知らせてきた」し、肉の目では見えなくなる「これからも知らせていく」と言われています。「御名」というのは「神さまの存在、愛の働き」ですが、「どんなときにも、どんな状況でも、神さまが生きてはたらいておられること」を、主イエスが私たちの間で「知らせ続けてくださる」。その主イエスの「御名を知らせる」働きを担っていくように、私たち教会は招かれていることを覚えたいのです。

ただ「聖なる者」とか「真理にささげられた者」と言われますと、どこかで「言葉においても行動においても間違わない、完全な人」というイメージを持ちやすいのですが、言葉の意味からいうと「神さまのものとされる恵みを知らされた人」の意味です。私たちは自分の力では「完全無欠なクリスチャン」にはなれません。なろうとしてもボロが出てしまう。しかしキリストの十字架ゆえに「神さまのものとされる恵み」をいただきました。ある牧師が「破れ提灯としてキリストの恵みが見える生き方をしたい」と言われていました。キリストは私たちの破れや弱さを通して働き、恵みと憐れみを見せてくださる方です。神に逆らう悪があふれる世界において、このキリストの恵みと憐れみを証し、御名を知らせる働きを大切に選び取っていきたいのです。